



安方志

安方志義傳  
前編下帙四冊

卷之四

13  
3237  
8



へ 13  
3237  
8

昭和十年九月  
購求

善知安方

忠義傳前編卷之五

緑亀館文庫

江戸 山東京傳著

霞の谷

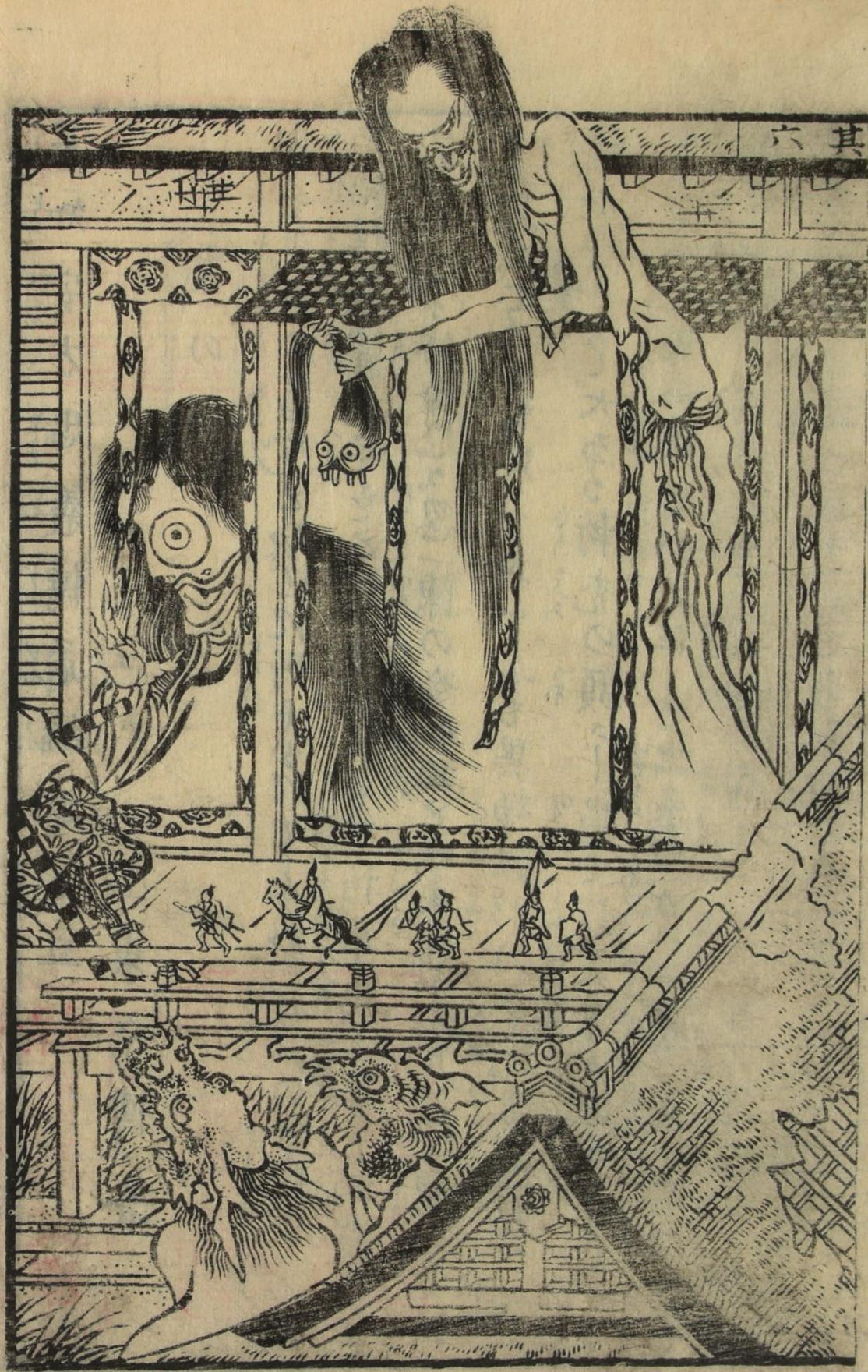
光国又書院と抄に所由にてん好金地の絵障子木欄  
于結構羨麗を尽とこのいどもいづれも破損草生苔蒸て雨露をまめ  
てぢらるる休るじが忽一陳の冷風颯と吹来りやあはとたる翠  
吹わぐるそのうち瓜つるふそあも異類異形の変化集居たる或ハ  
櫛形の穴より大なる斬禿の顔より出て打笑妻戸のわげりも一寸  
なるその人馬も乗行列以正しと出来ぬ或ハ隻眼一足三面六臂手  
長足長のごとれも文居て荒海の障子の絵の抜出たるうとうとヒの  
なるなり光国これを見てあか奥なき化なるか我手段を試んと

善知安方

五



其六



其六

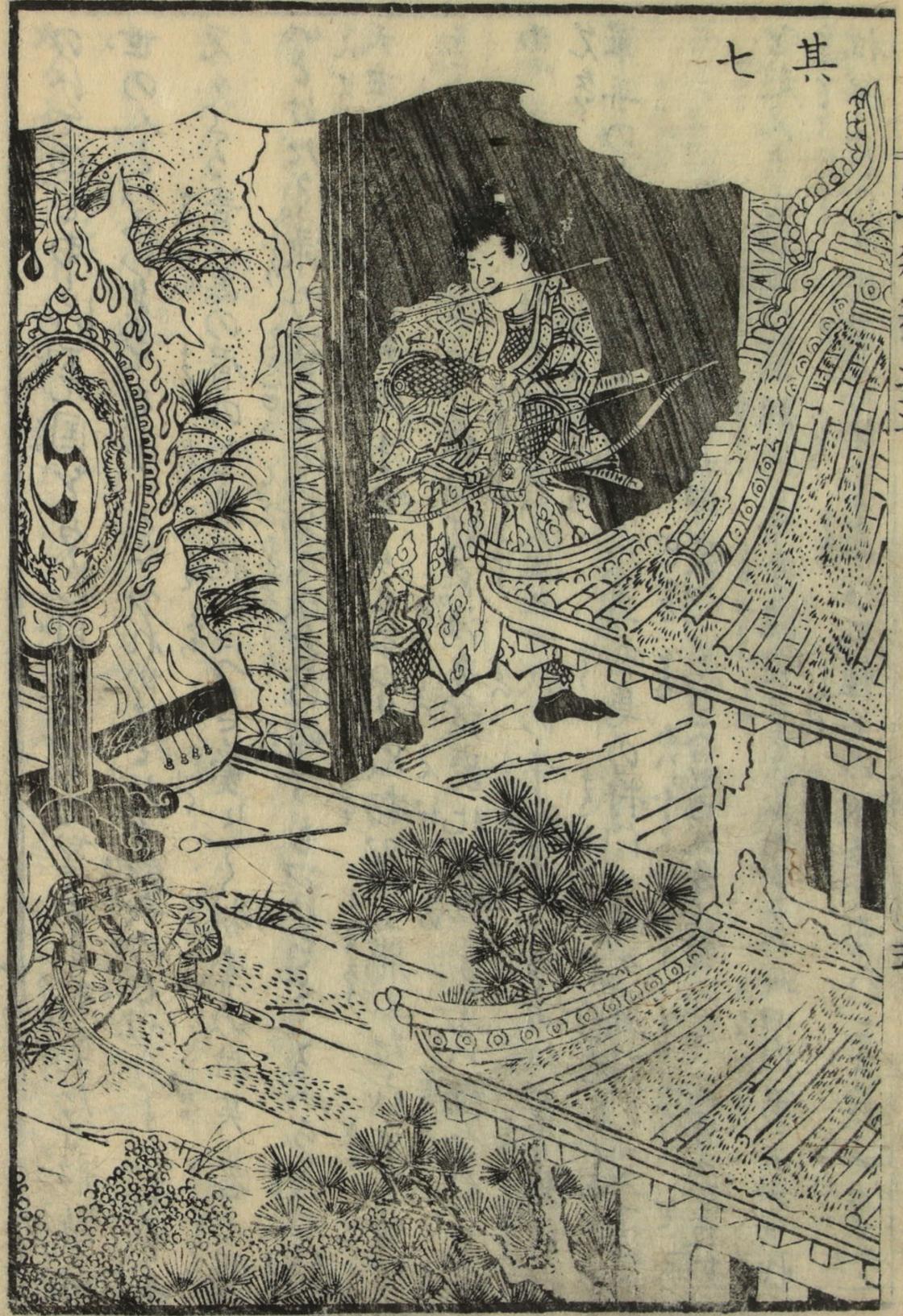
其六

必や猛勢ある化物をばせし。つゞくたぐひ来つる必ひあることひひ  
 腕をちぎりけり。つひ小板敷の上丹手枕して足ふみのび。や高軒とぞ  
 てぞぬらうぬ誠は大膽不敵の所為あり。と。まをころうふ時とら  
 しとぬらうと醒し。耳をびだてて。同べ。る。奥深き方小管絃の音  
 らこそえぬ。光国もく。か。人の住さる。旧御所小管絃のあり。く。つれ  
 づれぬ。これもある妖怪の所為なれば。何母す。その源とた。わ。び  
 こそ。その音ひ慕ひ。く。回も。ある。坐敷と。ま。と。長。き。行。廊。と。渡。り。ぬ  
 子。漸。く。小。其。音。ら。づ。ら。ぬ。る。不。由。に。て。又。は。び。う。ふ。小。三。重。小。つ。ら。と。た。ら  
 大。わ。り。楼。閣。の。中。に。是。乃。将。門。常。小。の。あ。る。の。美。女。白。拍。子。を。集。て。酒。宴  
 遊。樂。世。所。之。月。の。光。小。乘。り。と。こ。と。望。ま。る。小。第。一。の。櫓。小。遊。仙。窟。と  
 つ。小。三。大。字。以。鑄。なる。金。だ。の。額。を。か。け。たり。筆。法。九。々。と。道。風

理あるの筆をこそ多りければ。翠の薨。朱欄干。極彩色の掛。拱。錦  
 補卷の柱。桁。梁。小。珠。玉。以。鏤。懸。魚。葛。股。小。五。色。と。彩。を。狐。格。子。花  
 狭。間。小。の。つ。ら。と。で。飛。驒。の。た。く。の。手。以。こ。めて。結。構。美。麗。詞。小。尽。と  
 なる。も。わ。ら。さ。れ。と。こ。と。も。皆。敗。推。て。昔。の。光。彩。づ。づ。小。残。る。の。新。小  
 つ。ら。と。建。た。る。時。の。つ。ら。と。り。美。麗。小。あ。つ。し。や。ん。と。る。ひ。ア。れ。そ。の  
 費。の。く。を。く。あ。り。け。ん。量。知。つ。貢。税。以。虐。官。物。と。掠。ら。れ。と。る。こ。と  
 錙。銖。以。尽。し。これを用ること。泥沙の如く。道と急ぐ行人も。これ。為。小  
 道。以。塞。れ。農。と。勤。る。里。民。も。夫。小。執。と。農。と。妨。と。る。民。を。將。門  
 と。恨。も。ば。く。理。を。と。る。初。第。一。層。の。楼。上。小。灯。の。光。の。ま。ま。は。て。管。絃。の。あ。る  
 いと。妙。と。し。ら。そ。妖。怪。の。せ。ら。と。所。ホ。ら。と。ひ。あ。け。れ。た。と。人。の。う。ら。ま。る。魔。縁。化。生  
 の。の。あ。り。と。も。つ。ら。と。り。の。変。ら。あ。ん。打。と。つ。と。諸。人。の。眼。を。お。ど。ら。と。









国おむす。和殿一味同心の血判早速領掌あつて喜びおたふさといふ光  
国此人はよくえいび登むと途中あて定会つる樵夫をうりまじむ唯あされ  
てうちまのり居り。かの武者もつむびひるのぶうりあひの理かり今ハ  
何とうはくみやさん某の相馬の家臣隅田九郎将真が子因四郎真熊異  
名は荒猪丸といふ者なり。某才不肖なりといふも滝夜刃姫公補佐一々  
大儀と企武勇剛強の者得まほしく折く才を扮して往來のちまうさふ  
とて旅人の器量とてさうとせしむ。今日さうさふ和殿あひ相貌たびとふ  
どとそとれが口ざと志気勵とて死詞をもちひて此所へいざあひしやぬ大事  
とあじて后若違背し。玉の唯一笠射殺人と。やうさふかうとてとくがひ  
けり。あつて勇士と笠前さふ失りんとて瓜切し。み。口ざと鎌の刃とひき。膳  
気と折人と志さるふ幸あつて盟唇のうふ血。今。の流し。落ちたる和殿

味方さあつて宿因とおぼえたるも。その一巻の姓名を記して姫君の御  
心安んじし。つとて光国俄に面談やうげ。詞を正して吞けり。其は死  
ねど。御味方ほまふんとあひつる。女性の企切のうわはしと思案して  
心の中あつた無礼のこと瓜まじりあがり。計の奥妙なるをえさる。う。い  
う。違背つるまふん。唯今うて御味方不属し。大馬の労以尽し。い  
ん。と。懐中より旅硯とり出して。盟唇に掘江次郎當春と志し。さ  
が。姓名とりつる。い。か。あ。つ。ど。思。あ。る。さ。を。滝夜刃姫の一卷の巻を  
て大ふまむびの酒食と与て休息せしめ。と荒猪丸も命じ。侍女は  
て帳内より入る。荒猪丸光国をよそ家の席みちびけり。手鐙と  
たる四人の者も。先刻の無礼と口はむと一礼のぞ。あ。ま。つ。さ。退。き。けり。  
此時已に夜のつと明けり。ぬ。あ。の。四。人。の。者。は。と。あ。り。是。あ。つ。猪。丸。う





清夜刃姫旧  
 内裏小花の  
 宴松の  
 光国詩を吟  
 宴席に  
 夕の庭



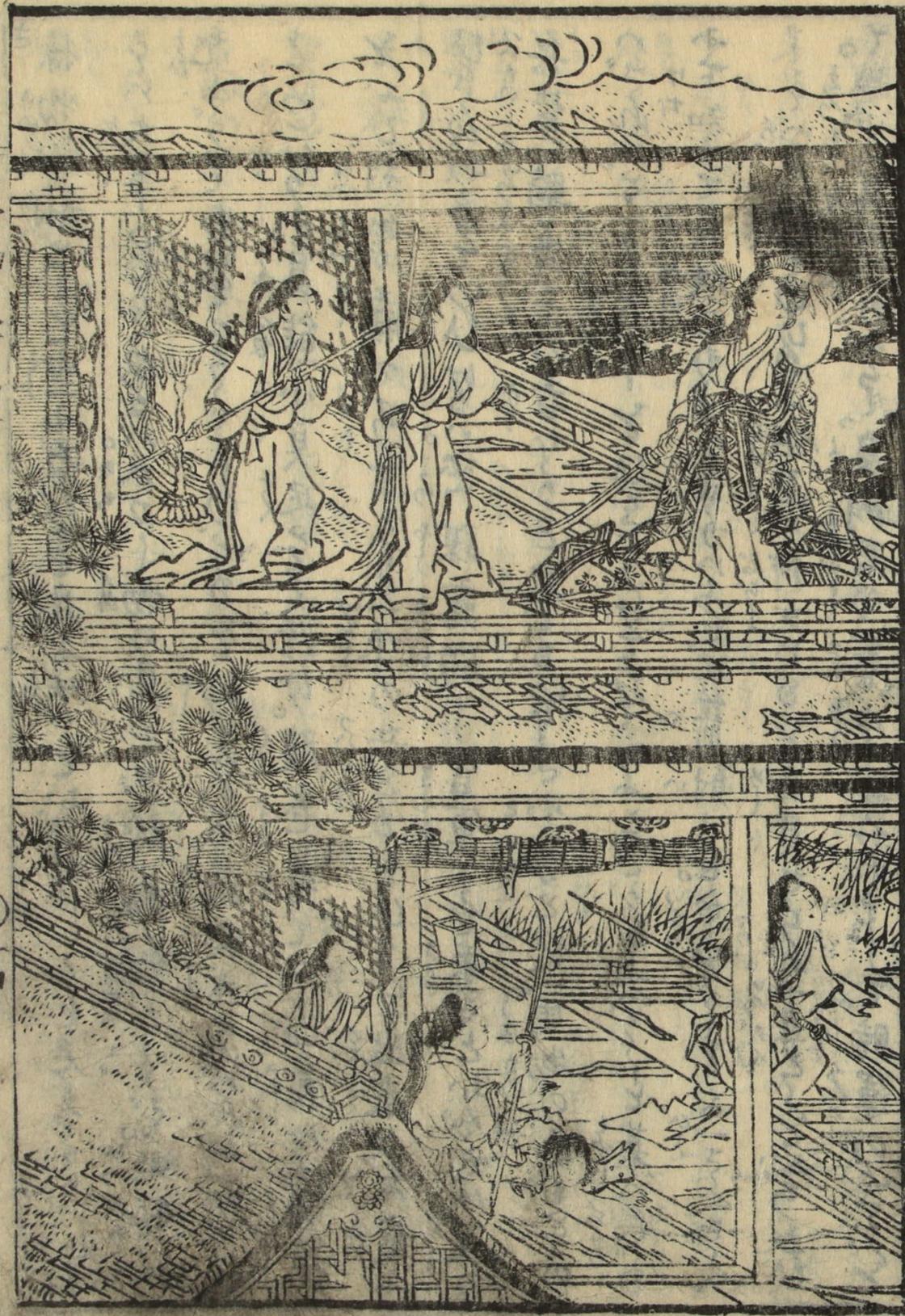


乃ひけり。の男椽側不卒伏して居らる。此時姫ハ下濃の几帳とを  
 一ににたる唐錦の褥のうへに服息ふよりそせりけり。男と見え  
 たり。汝ハ前日味方おほはれり。堀江次郎當春よか心かきどりり  
 よりぬとのさゆふあぞ。光国やづく膝行てそはらる。とて出けれ  
 ぬ。土器とす。そのさゆひけるハ汝ハ武勇剛強のさめて。文学風雅の道  
 あり。とめんとさゆひつる。ささかど齋院宮の詩と吟トなる。當意即  
 妙とる。詩文の事とも頗つとまへとや。今宵花の宴不  
 侍女ども不歌とよゆめたる。詩とつる者けり。とや。さゆ折に  
 汝と得たるを幸る。れとて題とさゆ。さゆければ光国詩とる。こととて  
 ひと名ふ。源順朝臣ふつとて。李ひたる文人なる。さゆ。案をけり。ひ  
 ちかく。やそ料紙筆硯とを。一絶と記ていじ。ければ姫こととる。誠是

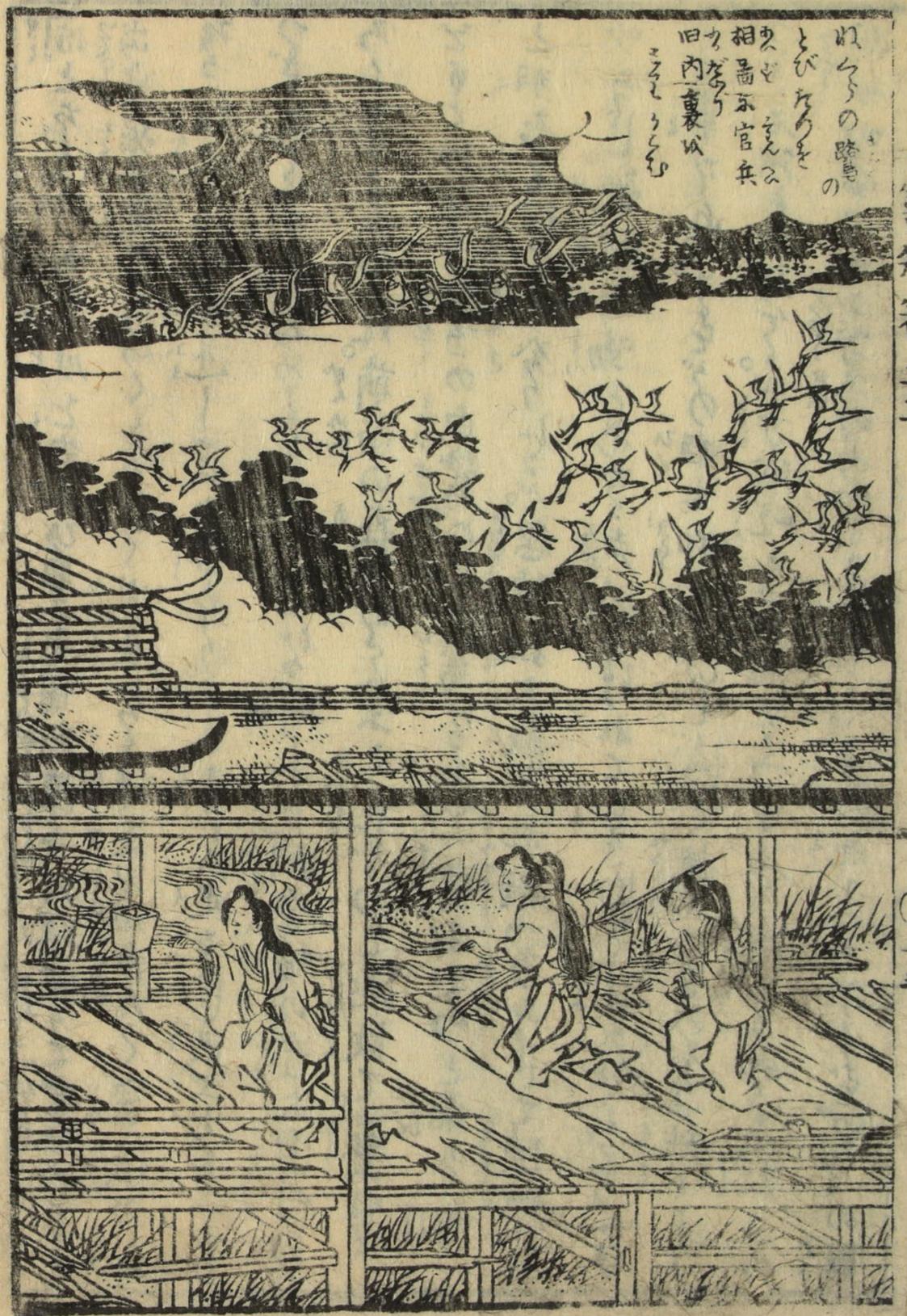
司馬遷相如。筆カヲ持。杜子美。李白。法と得たり。ある文武の達人  
 と。大に賞嘆。一む。光国ハ唯拙作と献じて。あせり。入山と答けり。時。姫  
 侍女どもとめり。と。汝等ハあつて。次へ。と。ひて退り。光国とらる。と  
 とめてのさゆひける。妾大儀と企つと。いとも。いとも。定る。夫。汝。今  
 上と心とめり。つけて。妾ハ帳内ちく。ほろろ。若。妾。大望とどけて  
 女帝とる。が。汝ハ大政大臣の位と授。萬機の政とあづけ。文武の百官と  
 して。拜賀せしむ。唐土の則天皇后。我朝の孝謙天皇の例。ならん。や  
 と。のさゆひける。光国大に迷惑の体。あて。下賤の才と以て。いさ。高貴の  
 帳内。ちく。づさ。ゆ。と。ひて。あ。さ。り。ふ。その。坐と退ん。と。と。姫。あ。ひ  
 花月の情。お。い。さ。貴賤のへ。て。あ。ん。ら。う。う。り。ぬ。と。ひ。つ。  
 織。たる。素手。との。光国。懐。ふ。と。は。い。れ。て。は。持。たる。短劍。と。ひ。き。い。じ。

さしてこそしく。汝味方おつとつどの。実心おあがごとと察しなれば戯ふ  
 こころせてころろころろ果しと懐中お劍とめし持たる妻と害し  
 恩賞おあづらんとのたふ疑は汝堀江次郎當春といつらと誠  
 へ大宅の太郎光国おあがごとと星とさうれてさどがの大夫も大お  
 て事あつへまゝいふ是非おあがごとと短劍とひらひとり。唯一はた  
 つさうけなふお女おあがぬ姫おれへさやえと避たが。袖香炉とさう  
 て目つぎおあつけたらと光国おとひわうとてそれと避又つさうかろお姫手  
 不や腹息ととりとそれとさうけとら曲者あつと皆おあれとよがうけれ  
 ば十四五人の侍女等。紅のたどれひきさおひ白柄の長刀小腰おあつと  
 へまゝと走り出て光国とやまとりとら四方一度おさうとかる光国  
 手お置とひれあがてそれとさうけとらあければ灯臺ひらりて忽一室真の

周とちる。侍女等度と失ふひお光国明障子お踢破りて空地おとどり  
 出空堀お飛入てのぐくともちり逃失けり。浦夜刃姫声たぐ。密儀と知  
 ちり彼奴おあつと逃しと大事件り。よも速く走るはじ武士どもおひ  
 つぎとさや追おあつとよがうとける折しも。銅燈煩の音大雷のと  
 ろくごごとくひびた。前面の森のあつらふ火花おんと飛散て森おれが  
 とめらめたる。数百の白鷺。これお驚けつあや一度おあつと飛上り。翻  
 と羽たさして飛おりけつが忽陳鉦大鼓と乱調おあつとて陳螺と  
 吹るし。鯉波と嘯とあがる声風おはれてささおしく因えけり。さひひけ  
 がる事おれべ。さどがの姫も仰天し。おそびく構おてせのむ。柱おとり  
 つさうけとびだて。四方お屹とててげまふ。ひらふ連る山お。数千の  
 明松おあつて。血星のあつまるごとく。螢の飛おととわらごと。ゆくの旗



御祭の御神楽



御祭の御神楽  
とびのり  
相馬不官兵  
田内裏城  
こゝろ

御祭の御神楽







昔口  
 新口

昔口  
 新口

大将韓つ不おん杖つゝつゝ。これハ多田たごの新あらた発意はつし子こ冷泉院れいせんいんの判官はんくわん代源頼信しろのりのぶ  
 朝敵あしたてき将門しやうもんの餘類あまのりと征伐せいばつとゞれ旨むね勅命しよくめい以もつつゝとてせむら生捕なまとり  
 都みやこへびえハ安やすけれども。さきとゞ女姓にょせいのこととられバ繩目なはりめの耻はにかと与あくも情なさけなし。  
 自害じがいいさきとゞとぞよびひける。大将たいしやうの左右さうぶは志こころとゞひハ譜代ふだいの家臣けしん  
 加藤豊後かとうぶんご二即忠正にすけただら坂戸九郎兼則さかどくさぶろかねのり後藤三郎則経ごとうさぶろのりつね加藤大夫親孝かとうだふしんかう首藤五  
 郎公清ごろうこうせいが輩たぐひあり。滝夜刃たきよや姫声ひめこゑうたて。あま口くちとゞ残念ざんねんマ我神功皇后われじんこうこうごう  
 のためふさふさ自鉄鉞みづくととて万国ばんこく征伐せいばつ。亡父むしやうの宿恨しゆくこんととゞさ  
 大儀たいぎを企こころはる小事せうじ半はんしてあづのい誠まこと是運命このしるしのつゝとゞとつゝたむ  
 此刃このやいばハ死しさるも一念いちねんの悪灵あくれいとあつて天下てんかと乱みださであぐべれつといひて夫  
 なる黒髪くろかみさつくとたつて。とゞさぬふたちのがと柳眉りゅうまゆとさつたで星眼せいがん  
 とみひぐに牙はととみ拳こぶしとあつてとゞとゞりあづり飛とあづり雨あめのごとく

ふとめらる火花ひばなのふ怒狂いかり形勢かたちがとつりりどもあり。我女われをんな生なつとつゝ  
 猛将まうしやうの眉まゆさし。いそり男子おんなんおとるべし将門しやうもんの娘むすめの滝夜刃たきよや最基もといの体ていハ  
 ありと后日ごにちの話柄わたりがらおとつとつゝ。錦にしきの袷あはせとぬれとて上着うわぎの両  
 袖そで中なぬれて氷こおりを短剣たんけんと枝えだとあつて白綾しろあやの肌着みぎのうへ  
 ちと服腹はつらふさつとつゝとて立ちあがり切目きりめ長ながくやがやが血ちと泉いづみの  
 ごとくつゝわがれて。紅べにの袴はかまとつゝとあつてそのひね左右さうぶつゝさむむたる侍女おんな等  
 それとて一度いちどお呀あと泣なげ或あるハ劍けんと吼こゑおつとたつてお伏うちあつて或あるハ  
 掌てと合せ念仏ねんぶつまじりけり。猛火まうかのうちお飛入とてうとつゝあり。けふられ  
 阿鼻あび叫喚きやうわん大焦熱たいせうねつのあつとぬ。目めの前まへおつて哀あはれなり。時ときハ怪哉けさい滝夜  
 刃やいばの胸むね間まよつと一道いちどうの妖気ようき立ちのり。ツの蝦蟇がまあつとて空中くうちゆうお飛と公  
 けり。姫ひめ忽たち本来ほんらいの菩提心ぼだいしんお飯いし。それとて積つ悪露あくろをうとつゝとつゝ

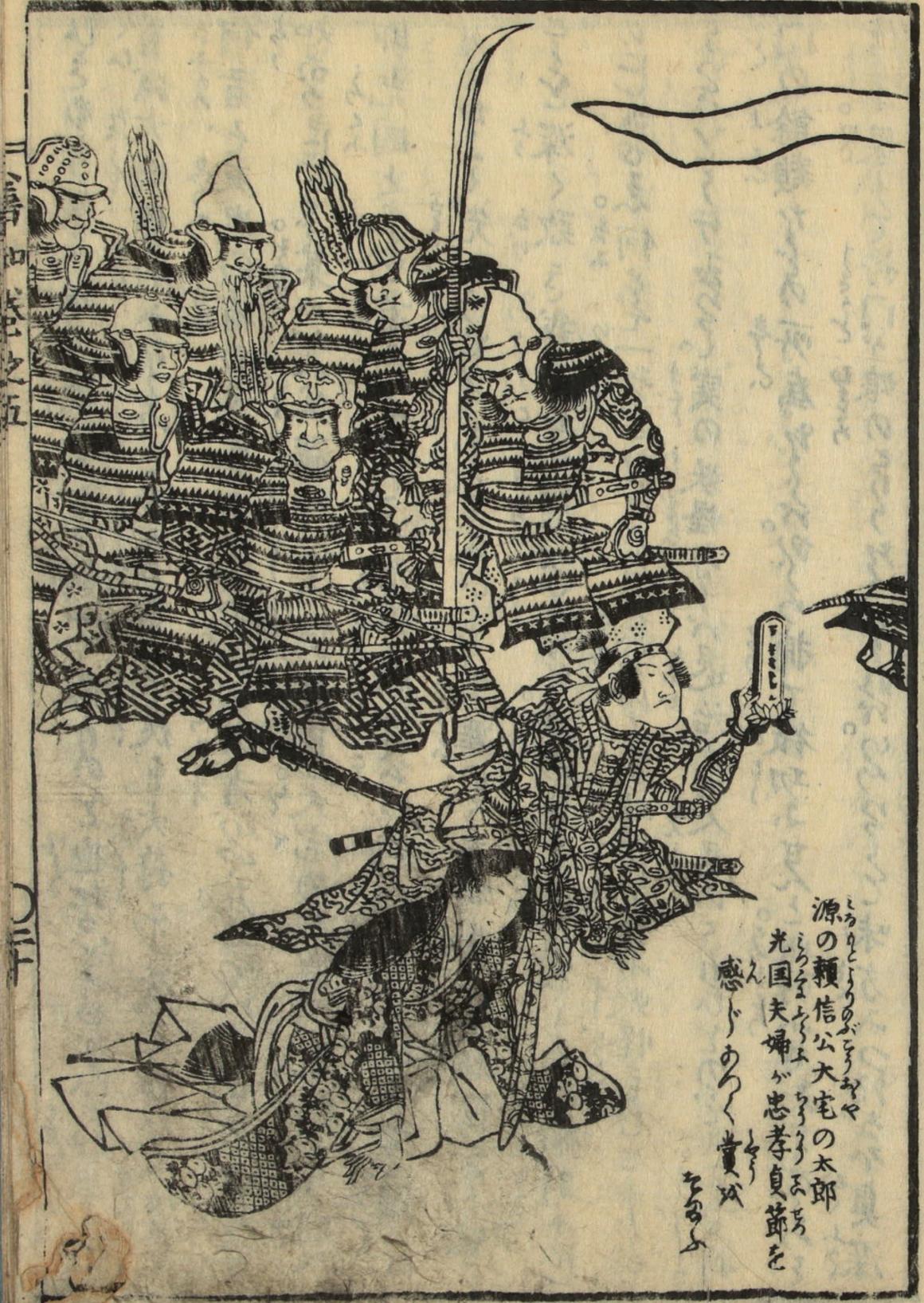
おぢえぞ。何也。自殺せしことぞと。うらうらぶらぶとける。かゝるに。も  
苦痛とぢえぞ。忽ち直指人心の深味と大悟。結加跌坐。眼とぞとて  
一頷と唱て曰

閃雷光 撃石火

眩得眼 已蹉過

と唱かると。わづらがごとく遷化しけるが。折しも天井焼落て。多く姫の尸灰  
灰とほけり。是乃内芝仙蝦蟇の妖術と以て姫の胸間小口け入種々の暴  
悪。凶なまじりけり。姫宿善の果報ありよ。最期子のぞとて蝦蟇なるど  
公忽三藐三菩提の本心小飯しける。あつとて官軍姫の尸灰。炊とて  
証とよべぬのありぬ。せんまゝ荒措九首とて。大刀のさくらさくみ  
つなれ。凱歌と囃とあげたりけるが。折しも夜風烈しく吹布て。炎の丸を

黒焔のうちふ飛ちり。宮殿樓閣暫時のうちに。尽く焼失て。塵ものぞ  
むらふふたり。此時夜の已ふあけたり。けと。頼信公兵士。廣原ふひと  
とて。まづく人馬の息。休れむひぬ。さて此時の子細とたのぬ。朝  
敵といひわが。野伏浪人どもと。つらふ集て。りりたる。女將とむん。お  
大軍。催まの。无益あり。そ。百姓原ふ命。とて銅釜。煩を放ちぬ。ぐ  
の。路。以その。ゆふ。相番の。狼焔とほ。しく。小。明。松。旗。捺。物と。あ。い。大。軍  
の。よ。う。さ。ず。ふ。る。を。て。敵。城。か。び。中。小。勢。と。ぬ。て。打。取。へ。皆。頼。信。公。の  
計。策。か。り。と。ぞ。ま。じ。な。ぐ。内。裏。ふ。火。と。う。け。何。者。の。所。為。と。大。將。と。ほ。め  
ひ。ぶ。ら。し。る。の。と。け。所。ふ。一。人。の。若。者。白。布。の。ち。ち。巻。し。赤。糸。の。腹。巻。の。う。ふ  
黒。小。袖。着。て。袴。と。た。く。ら。う。た。る。が。ち。ぬ。首。七。ツ。ハ。ツ。腰。の。ま。ら。と。ふ。く。と  
は。け。全。身。血。ふ。と。ぬ。了。一。人。の。手。弱。女。の。振。袖。の。小。袖。着。て。緋。の。袴。の。も。ま。を



源の頼信公大宅の太郎  
 光国夫婦が忠孝貞節を  
 感ずるのく賞状  
 二〇〇



源の頼信公大宅の太郎  
 光国夫婦が忠孝貞節を  
 感ずるのく賞状  
 二〇〇

ひきあげたるが。錦の袋ふ入たる剣アりののど抱たるとさるやひて馳来  
首以大将の前ふりて。二人とも平伏も。大将より派えむひて。汝等ハ  
何者ぞ反忠の者か。かとのこま。わの若者。わ左ふて。いひ。わ。君。か。見  
知。あ。は。ま。じ。さ。が。某。ハ。父。満。仲。公。ハ。は。な。り。し。大。宅。の。左。衛。門。光。雅。が。子。同。太  
郎。光。国。と。す。ま。者。ふ。り。づ。も。父。光。雅。満。仲。公。の。御。勤。氣。と。わ。う。も。浪。の  
身。と。な。る。も。先。だ。つ。て。才。ま。う。と。い。ひ。し。生涯。の。うち。御。勤。氣。の。御。心。と。う。け。さ。る  
こと。を。深。く。歎。き。我。死。后。ハ。汝。一。切。と。た。て。御。心。と。を。う。と。と。今。般。時。ハ。じ  
の。じ。ゆ。ゆ。え。何。を。一。切。と。た。て。わ。や。と。心。が。け。ぬ。が。此。内。裏。ハ。妖。怪。ま。む。と。し。し。と  
う。と。と。う。け。あ。り。も。実。の。妖。怪。あ。る。べ。退。治。し。て。人。民。の。う。れ。い。と。の。ぞ。も。若。又。將  
門。の。餘。類。か。の。所。為。が。な。り。ぬ。が。わ。捕。て。微。功。ふ。せ。ん。と。此。所。ふ。ま。た。ぞ。と。ろ。ろ。と  
ほ。る。果。し。て。將。門。が。娘。の。こ。り。う。た。る。な。り。ぬ。が。り。り。と。味。方。ふ。つ。れ。な。か。真。深

探アんと。と。ろ。ろ。ち。幸。な。れ。り。某。が。妻。侍。女。の。うち。ふ。交。ア。居。て。あ。ひ。て。ま。う  
け。お。ろ。ろ。と。後。元。あ。る。と。と。告。げ。れ。等。軍。用。ふ。た。く。り。か。さ。る。火。葉。と。奪。り。て  
あ。ふ。ゆ。ゆ。え。技。穴。小。地。雷。火。と。仕。け。お。れ。皆。殺。し。せ。り。と。計。ハ。折。り。も。銅。発。煩。ひ  
さ。目。鉦。あ。り。て。君。御。勢。と。む。け。む。ん。様。子。か。れ。ぬ。が。さ。も。よ。れ。折。る。謀。計。暗。合  
し。ぬ。と。あ。ひ。妻。と。救。出。し。橋。手。よ。り。と。逃。出。る。敵。も。と。如。此。打。り。て。戦。の。お。ろ。と  
待。ハ。と。の。六。妻。唐。衣。の。尾。ふ。つ。と。の。ぞ。ぞ。あ。目。と。い。つ。ぬ。つ。ぬ。と。妻。ハ。父。家。士  
藤。六。左。近。が。娘。唐。衣。と。や。と。者。ふ。え。ん。と。と。父。ハ。手。打。ハ。あ。り。し。后。あ。り。の。夏。夏。又  
と。さ。ぬ。と。と。わ。り。光。国。が。妻。と。わ。り。又。も。あ。り。の。夏。目。ハ。あ。ひ。て。つ。ひ。小。如。月  
尼。ハ。と。り。れ。此。旧。内。裏。ハ。移。り。て。侍。女。の。うち。ふ。く。り。ぬ。と。逃。出。さ。手。段。か。け  
し。は。是。非。あ。り。夏。月。日。と。か。ら。て。い。ふ。と。と。夫。ハ。再。会。し。奪。さ。と。た。陰  
の。太。刀。と。取。り。し。の。が。れ。出。ぬ。と。語。て。わ。の。名。劍。と。大。將。の。尊。覽。ハ。と。ろ。ろ。と。へ。け。

光国ささく水无野川。羽太九四郎が首と又つけ。その口の裏より中  
たる将門を慰むる祭文の旨と盟誓の起請文の旨と同筆あるとあり  
てつれなき妻唐衣此所ふあんと悟りしが果て夫婦再会の時を得たり。  
かの西谷へ共小荒猪丸が筆跡あるとぞ。かくて頼信公夫婦が物語とに  
あきれさといふあをける。我敵を女とあまどりさるりの計へあるまじと  
あひつる。汝若技穴をふさぎむら我われ等以打りまんこと必定あり。是  
汝が大功あれバ我父満仲ふりり光雅が勘気とゆるまどぞとて加藤太夫  
余ど一紙の赦免状をかしめて与へけぬ。光国られと押ひをれ亡父が灵  
を慰むる。あ千部万部の経陀羅尼あも。さうふさるるるりのつらとて  
懐中より光雅が位牌をこそ出。免状をたむけて頼信公の仁心と感  
うら涙不むせひけり孝心のやど。ふひアれて哀なり。頼信公唐衣小む

我藤六と手打ふりたること。以後悔し。せめて汝等がやとたつねて  
家とほがあらんとあひり。がひふたづぬあささ。日來それと愁つ。今日  
えむど汝ふあひりの正是藤六が靈魂のみちびれたるふうとがひたり  
世ふまれある忠臣を失ひ。我一生の誤あるとて落涙。小鎧の袖とぬ  
されけし。唐衣も其志と感して共涙をかにけり。頼信公さうひて  
光国ふむひ。今よりあつた。ためて汝を我家来まじ。まじく忠勤と励  
よ。藤六が家とも他日再興し得まじ。と。のさう方あるのみ。ひ。当坐の  
たぬかのにて銀作の太刀一振をひくれけぬ。兩人感謝して。さうこと。か  
なり。光国又申しける。滝夜刃姫が弟將軍。太郎良門と名告。今越中  
山ふたせらり。此御勢不棄。と。むひて。か。さ。軍とむけられ。ア。御  
征伐あれ。某御奉公始。御先仕。と。サ。大將其儀。さ。と。と

同意して。たつふ出陣の支度とせしめられり。

○此後光国唐衣がなふ男子出生し。其児成長して大宅光任と名告  
頼信の子頼義。その子八幡太郎義家。二代小仕へ安部貞任征伐  
奥州十二年の合戦。不比類をたてし。して義名を千歳小傳とを  
かく子孫小忠義の勇士とせられし。正是光国夫婦が忠孝貞節世  
小とぐらふなり。天地神明の擁護し。あふ所とあらはる。

小鶴池 第二十條

爰又良門ハ越中立山小引。菟野伏浪人とも追々味方につけて合戦の  
營の外他支あり。専戦場つひにの調練し。月日とあつて。頃しも  
弥生半。めて山の櫻今と盛るれば。花はあがて。氣を散。ふへと伊賀  
寿太郎。とあらふ。小賊らとあつて。えとよし。よに所。あつて。岩上

み毛鬣とあらはる。良門へ猪の皮のあきりの。上み坐し。伊賀寿郎。その  
ついで。野風。呂標子。吸筒。提重。とたつて。酒宴と催し。けり  
岩下。一味の輩。小賊等。大勢。あつて。居て。或ハ清水。城を。飯とか。に  
木の葉。成焼て。酒とあつて。或ハ。峯。ふの。を。て。獸と。と。杖。小。鳥。と。射  
て。着。小。と。あつて。折。節。の。一。與。あつて。此。日。晴。明。の。天。氣。あ。て。空。小。塵。む。  
この雲も。わ。遠山。波頭。の。と。く。は。あつて。彩霞。錦帳。の。と。く。た。り  
と。れ。松。杉。の。緑。も。花。も。あ。つて。え。も。の。と。れ。が。好。景。なる。良。門。伊。賀。者  
とも。小。數。盃。か。つ。け。手。下。の。者。も。あ。つて。大。井。入。真。じ。け。ら。伊。賀。者  
醉。小。乘。一。某。御。者。も。昔。風。と。一。一。年。は。い。と。と。立。上。り。太。刀。以。拔。て。兎。の。頭  
と。さ。の。さ。の。は。と。ぬ。れ  
戈。鋌。劍。戟。を。降。こ。と。雷。光。の。と。く。か。り。磐。石。富。以。再。と。る。春。の。雨。み

相同然其のいとも。天帝の身の内近づくで修羅のれが為小破る  
 ことる。このあがて舞けぬ衆人共とやめたる。此のいひのいひ  
 聞えられとも。后みおりのわのれら。才みさうて。大み不吉の詞り。良  
 才り。奥みへ我も一獲と施して又ささる。とて権眼をこ。呪文を唱  
 へ印をひきけぬ。か忍岩石鳴動。前面の小石ひくと動くと又へ  
 へ。マを数百の蝦蟇と化し左右み列して敵味方をうち。魚鱗みつたり  
 鶴翼みたり。と上り飛上りして。合ひぬ。衣入られ。以ておな  
 奇如の術と感しあひぬ。伊賀寿し。本美平二年。神父将。元名と  
 純友殿。同時み在京。み比叡山。のをも。根本中堂の前。酒宴て  
 遊びあひ。が。み平安城を見。始て大儀を。立ひ本意と  
 遂に将。君ハ王孫。ある。帝王。純友殿ハ藤原氏。白

リ。と。両将相約し。み。と。今。君と某と此蝦蟇の圃を  
 して盃をぬ。の時の趣。み。何なり。君帝王となり。玉。某。白と  
 け。と。ら。上。死。蝦蟇の圃。幸の。右と味方。左を  
 敵。へ。て。勝負の吉凶を。と。まだ。見居。て。け。蝦  
 蟇。み。或。い。と。倒。なる。を。飛越。て。む。あり。或  
 手負の足。退。も。あ。と。み。一。群。と。み。一。群。上。み。り。下。み。る。  
 か。ひ。つ。争。ひ。血。な。け。み。り。て。合。け。る。味。方。み。へ  
 なる。右。の方。の。大。将。と。か。大。蝦蟇。と。ひ。と。て。地。上。み。た。其。餘。の  
 蝦蟇。へ。と。ぐ。り。の。小。石。と。なり。み。け。良。門。これ。を。屹。と。て。持。て。盃。以  
 撲。地。と。か。し。あ。な。あ。り。死。多。い。味。方。み。た。と。大。将。の。く。み  
 殺。し。へ。時。み。り。この。不。吉。なり。旧。内。裏。み。か。と。姉。の。の。の。の。



將軍太郎良門  
 術をあらて蝦蟇の  
 をなほむ伊賀毒  
 太郎將門純友  
 平安城を見訪  
 大儀をくらふ  
 昔のころを

いざよひもどつて下總より早打して栗胤早太雜鎧着て陣笠  
 ながさへ飛ぶごとくみえしつゝ大息つゝとせしつゝいふも一昨夜淹夜刃  
 姫花の宴みりしむらへ夜飲を催しあふ折し敵方のまじり大宅  
 の太郎光国と尸を者頼信小内通し相害の石火矢をくらちて四方  
 をめし返り抜たみ地雷火を仕つけて宮中を一面の火とほゆべ姫君  
 逃出あふことあふむつひみん腹をされぬ荒猪丸をくらちて一味の  
 面々或ハ打死一或ハ自殺し侍女童みりるまで猛火のらちみ飛入て  
 のらむどわろび失れ某早走つみ達しなると幸一方を斬ぬけ夜通  
 み馳参り御註進仕りゆ途中あそけむのゆべ頼信大軍を起しと  
 当山みらせむひは御用心あふべしと息もつとあふむのべたつとぬべ  
 良門伊賀寿をさじりてる居たる輩唯あふれあふれとひりき

たる口をさる者もあつとけり良門怒気天みさりのあらと眼の色血の如  
 赤くあつとその面或ハ青くあつと或ハ紅み変り頭の汗烟のごとくみたら  
 のらむと炎のごとく息はつとせしひけり隠謀半みと露頭し好  
 自害あつとつゝも本望さげがじ此方と半途み出て官兵みむ  
 合頼信をつみ殺し生膽をくらひて好人の修羅の妾執とさつと  
 だし伊賀寿軍の用意せしとせしとせしとみせれて太刀あつとつて飛  
 つとんとつとを伊賀寿おしとせし御憤りの理われども王位をのぞむ御  
 身めて卒尔み軍を起しあふ御思慮浅み似たり一旦とつとをち我  
 時のつとを待て本懐をとげあつとあつと好君の御孝養あも相  
 ちとつとと諫を同入どつとつと当の敵をえあつと何安間と過とつとつと  
 心りく我一人とせむむ頼信が輩を皆殺みしとつとぬむとあれみ

あめて已みせせのぞんと一たる背後の方み。アれたるまらるる良門を  
くとの声あも。良門屹と立つとらぬ肉芝仙雲中より下りて岩上  
みどまら。寛然としてゆく。我如月尼が胸間みつけ入て仏戒をてて  
阪俗なる一りて汝み力を合させつるが彼宿善の果報いじく菩提  
心滅せざれば。なぐつさまと入ることあふほど。最期みのぞとて本来の  
仏心み立ちうぬ彼頼信が為み亡くも因縁の志うる志ある所なる  
いんともまぶるうど。今官兵みむひ合て軍せん石を抱て淵みか如し。  
ゆく志のびざぬ大儀いほがじ。唯よく志のびて時運のゆるを待じ。  
我さ死だちて茨木童子み命ト。頼光主従をあらがさんとるにが。  
つひみ茨木渡辺源次綱が為み腕をさうとて。辛き命をうてとまぬ  
くぬぬ又洛中み妖怪をあらわして人民をなママを今上帝の不徳と

のてせ且頼信が行跡を乱して自滅させんとえるとしも。藤六左近が忠義  
みよりて夏をまけむ。皆是時のいづらなるなり。志うるといども我別小葛  
城山の土蜘蛛み命トて頼光と亡さん計策ありて汝一旦此所におちて  
九別み渡り。あな味方と集時運到来を待て軍と起るとい。  
志る時天下は奪んこと安うん。うらむと今卒示み軍と起を  
ことならぬ。又再会の昔あはしといひ終り。中て雲み乗じて飛公けを  
めして良門肉芝仙の教示みよりて。やりく憤を志のび。おち行つとみ  
心と決しけむ。伊賀寿太郎いそく。某が手下の阿闍梨太郎とやま  
若木曾の山中み寨とめつて引籠ひ。ハ君小賊等の半と召具され  
に時ゆやか。かこち行五へ某ハ小賊等の半とるもみ跡み残り軍  
器兵具をころりとこめ。山寨を焼失てあより追付やとて。志づく

高野山



高野山非事理の  
 旅僧妖気の  
 我らをも  
 蝦蟇の怪を  
 事ハ後編  
 詳カク



高野山

かの地み御足成さめらんと。それより便よた方へ御越ありは伊豫  
の熊山くまやまの澤太郎さわたろう今張六郎いまちやうりく讚岐さぬきの蛇九郎へびく同第熊尾  
の新六紀伊国しんろくきいの田辺たなべ一族いちぞく三十七人さんじゅうしちにん播磨国はりま法花山ほっけさんの架波衣かばい太郎  
備前びぜん小射越原こさへつげ今木いまき備中びちゆうの松山まつかみの荒四郎あらい肥後国ひごの尾道おののち六  
郎ろく安藝国あまのくにの金剛十郎こんがうじゅう蓬屋よもぎやの四郎しやう周防すおう小国屋せこくやの梶五郎かぢご長  
門国ちのくに小萩こはぎの勘六かんろく同金地丸どうきんぢまゐ柵根父子さくねふち杉兄弟すぎあに等らうと首くびにて三道  
の張本ちやうべん百六十三人ひやくらくじさん其外そのほか一族いちぞく從類じゆんるいめぞふるふいと取とあざとど都是純  
友殿ともどのの恩成おんなりうける者ものもたれば味方あじきあつんは必定ひつていなり。されば  
ゆづくへ御越おつげあづんも自由じゆうわて小とて俄あやう小旅せうりょのよそをひととらふ  
まば良門まばらもんあづるばとておち支度しだくとら折せりも暴風はうふう坂さかをかほし来て  
さやくと梢こしほをかりし。善知安うきん方夫婦まともさうづふの灵魂たまごころ忽然とつぜんとあつるれぞ

いよいよ悪企非望を御おんさすしとぞれどや。情なさけなるに御心おんこころや。うとて死御所存ごしよせん  
やと歎なげつゝいよいよ良門らうもんこれをうへて又来またきし。執念しやくねん深ふかき奴原ぬらとや条じょう大儀たいぎ  
の二折ふたせいぬいの諫言えげんや。そく立たちたくとひつ刀やいばを抜ぬて斬きる松まつ六むつ忽とつぜん雄ゆう雄ゆうの  
鳥とりと化けてさも還かへびけようそんくやととくと鳴なて空中くわうちゆう飛と本ほんねやとなく  
旅たびの用意よういとらひけと。良門らうもん伊賀いが寿す太郎たろう母ははつら心を告つげあつこの小賊せうさくを  
具ぐて阿爾あ梨り太郎たろうが山寨さんざいをさうらば山やまづゝひの回まわ道みちみつらとて。から  
かたけりし  
○此後このち将門しやうもんの妾めかけ桔梗ききやうの前まへ自信じゆんじんて将門しやうもんの恩おんを復かへと。又また附つての桔梗ききやう  
原はらの来き由ゆ葛城山かきやまの土蜘蛛つちぐも美み女に化けして頼より光ひかりみちうは死しつひみ四天王しやうてんわうの  
輩たぐひみ亡なさう。又また大宅おほしやの光国ひかりくに忠ちゆう義ぎの又また良門らうもん伊賀いが寿す太郎たろうと共ともみ山  
陰いん山陽さんやう両道りやうだうをつて九州きゆうしゆうみ渡わたり。ち味方あじきをあら。播州はくしゆう三石さんせきの奥おく

小柵をのりて立籠多田の城を攻けり。頼光頼信の武徳みとりて安  
 術マダと永延三年三月二十六日。渡辺源次綱子生捕て誅戮せり。又  
 伊賀寿太郎誅み伏。又美夫丸道心源賢阿闍梨の道徳みとり肉  
 芝仙蝦蟇の術をぶきて滅亡。靈魂石と化し。虫みこれと蝦蟇石と称る  
 又善知が子千代童母の敵老熊とち。孝行の徳せりて源家の臣たり。又  
 富貴栄花をこころひり。又附て善知夫婦忠義貞節の功徳より。天堂  
 小生と歡楽を定り。又将門良門父子地獄みちりて無限の苦痛より。又  
 又滝夜刃姫冥途みちりて将門良門みちりて。又源家敏昌の又小  
 至るまで。惣て善報悪報の速き例。恐慎の理と示て。後編五冊。小詳之他  
 日鏡持の時と俟得て看べし。

善知傳卷之五終大尾

作者 山 東 京 傳  
 校閱 山 東 覽 山

附 六

案、小將門の事跡ハ、義徳の古書将門記を証とす。又将門絶友  
 東西軍鑑あり。前太平記将門の一條あり。此書より出。或ハ帝王編  
 年記扶桑畧記平治物語平家物語東鑑盛衰記太平記等の諸  
 書み往々畧記と良門の事跡ハ、前太平記みよとしく録せり。其書  
 ハ近世の書なり。且バ、たゞ小実ともおぼえがたし。初此草紙ハ良門の  
 由急よと大路と。善知と云。謡曲の趣を徑と。又ハ狂  
 言綺語みまうけはらるたり。物語なれば、尽くそと。言ふて歌  
 舞妓の狂言みひとく。見女の徒然ハ慰るのそかり。唯善人  
 一旦衰るといふも。再時運のひくくみあひ。惡漢一旦盛り。るも  
 つひの天刑をかうり。善惡到头。つとむ報ある道理を示。

露をくろり諸悪莫作の便とも成りしところのこせめてよある  
 なるも。都是童の昔語やく雲の跡をーごと根をー草の根  
 かりーこと見るーたぬひは

醒醒齋京傳識



東都

一陽齋歌川堯豆國畫



削剌氏

小泉新八郎刀  
 同 平八郎刀

醒醒齋山東翁著書目錄仙窟堂藏版

○繪本忠臣水滸傳 全部十卷出来

○全復讐奇談安積沼 全部五卷出来

○全優曇花物語 全部七卷出来

○全櫻姫全傳曙草紙 全部五卷出来

○骨董集 好古漫録ノ書ナリ 全部三卷近刻

朱子讀書丸 清人覺世道人傳方 椿壽奇拜田信明製 一包一匁五分

○氣こんとほし 〇心腎のまよそんふよー 〇きのこごぶく 〇ひふよー  
 ○せれつとてよるん人用ては 〇老ふ辛勞おかくまろ人老若男女ふふをさうとせおお不えて  
 〇あはあり 〇中まらるゝ又病身の人へのふたくりおく 〇さうり 〇の碎茶をつく復痛  
 のこごひの一粒めて奇効あり

小兒無病丸 小兒ふんじのふんじの薬やうそう 〇包百十二文  
 山東京傳烟艸店



浪花 好華堂主人著編

# 大伴金道忠孝圖會

前篇五冊 後篇五冊

此書天智天皇御宇少首海國鑑の功  
遺蹟也史記有之 大伴金道忠孝の成  
謂大伴直鳥兄と云く家國と押領せ  
奸悪大友の事と云見原香子御合戦の  
次第金道の主と云水鳥の忠義雅明  
義に直鳥の事と云金道不苦と云又  
り此と復 本領の事等と云の事と  
洩す事かぞ 実録と云編次と云  
善と勳の事と云と云と云の事と云

同上

# 扶桑皇統記圖會

前篇六冊 後篇七冊

此書八公皇御宇代天孫の御治世  
醍醐天皇の御宇の御事の本元宮等  
院の草創代々の人物の行条と紀を所記  
役行者皇都伴光吉備大臣衣通姫光明  
皇后氏不傳正引 刺道鏡惠見押勝中  
將姫傳教大師法法大師田村丸浦嶋  
五小野皇在原行平兼平小野小野僧  
武田實相長壽寺古人の實傳と探  
善と勳の事と云と云と云の事と云

# 新刻 萬代早引節用集大成

直字 一冊

節用集の善本數扱を此に便利成書  
不足のりて 隔書發拜因ひ遺傳少や  
末見雅俗の文字可輯録 尚諸人日用の更  
右に置る可高覽と給人交わ布而已

# 増補 王代一覽

正編 水五冊 切巻 一冊

此書天智天皇御宇代後陽成院天皇天正十五年  
三十年は同の治亂更政の沿革名人達士持政  
國の具慶金銀米錢此其分るに化と屬と云  
其本書所引記  
考古の小史と云







手鳩堵菴先生述

女訓ハハヤン女前訓ハハヤン種タネ

姿見

繪 全一冊

此書ハ女子七女ノ教也。其書ハ一冊ニテ、女訓、女前訓、姿見、種、衣服、種、繪、全一冊トシテ、此書ハ、女訓、女前訓、姿見、種、衣服、種、繪、全一冊トシテ、此書ハ、女訓、女前訓、姿見、種、衣服、種、繪、全一冊トシテ、

録田新弘先生作

心學五則

全壹冊

六樹園主人譯 前篇六冊

通俗排悶録

後篇六冊

浪速書肆

河内屋茂兵衛藏收

心海橋通性書房

安政六己未歲永子秋

三都

江戸大傳馬町三丁目	丁子屋平兵衛
全馬喰町二丁目	菟屋幸三郎
全京橋弥左工門町	大島屋傳右工門
全京橋五郎兵五町	中屋徳兵衛
京都三条通御幸町	吉野屋仁兵衛
全寺町通五条上ル	山城屋佐兵衛
全三条通寺町西入	丸屋善兵衛
全二条通堀川	越後屋治兵衛
大阪心女橋南壹丁目	秋田屋市兵衛

書林

